



ひまわりコーチ



みずきあかね

ひまわりコーチ

ピッチャーが投げたボールを空振りしたら、コーチのこわい声が飛んできた。

「シュウ！ 何やってる！ ちゃんと見ろ！」

今日のバッティング練習、全然当たらない。バットをかまえなおして次の球。

今度こそはと思い切り振ったら、ボテボテの内野ゴロだった。

来週の試合も出してもらえないな。

練習が終わって帰ろうとしたら、フェンスにずらりと並んだひまわりに気がついた。みんな太陽を見上げているのに、一つだけ下を向いている。

なんとなく近よってみたら、下向いていたひまわりの花が、ぬうっと、きりんの首みたいに動いて、こっちを向いた。

「なんであんなのが打てんのや。へったくそ。ちゃんと球見とらんからや。」

ゆらゆらとゆれるひまわりから声がする。

ちょっとびっくりしたけど、ひどくない？

「おまえだって一人で下向いていたくせに。」

「そりゃあ、上ばかり見とると首が痛とうてかなわんからな。まあええ。ちょっとバット出して振ってみい。

見とったるで。」

どうしてひまわりに指図されなくちゃいけないんだと思いながら、僕はバットを出して、素振りをして見せた。

するとひまわりは葉っぱで腕ぐみをした。

「悪くない。問題は集中力とタイミングや。」

ホントかな？ でもうれしいかも。

「これから毎日来い。ホームラン打てるまで教えたるで。」

「なんでひまわりのくせに野球知ってるの？」

「そりゃ、おまえらを毎週見とるからな！」

そう言ってひまわりは、がははと笑った。

それから毎日、僕はひまわりの前で素振りをした。

たまにひまわりは「ちゃんと肩入れろ」とか、「足や尻でリズムを取るんや」とか、いろいろうるさかったけど、うまくできるとすごくほめてくれてうれしかった。

次の日曜日。

試合の前に監督が今日のメンバーを発表した。いつも通り僕は呼ばれないだろうと思っていたら、

「ライト、シュウ。」

って名前を呼ばれた。

ライトを守っている陸君がカゼでお休みだからその代わりらしい。

みんなが「がんばれよ。」って肩をたたいた。

初めての試合。うれしいけど、緊張で手のひらは汗でびしょり。

心臓が喉から飛び出そう。

僕はミーティングが終ってすぐにひまわりの所に行った。

「ひまわり！ 試合に出られるよ！」

「そうか。毎日練習したかいがあったな。あんだけ練習したんやで必ず打てる」

ひまわりは大きな葉っぱを揺らした。

「応援しとるで、がんがん打ってこい。」

試合が始まった。

僕のチームは後攻。ピッチャーの青木君は絶好調で、三振をいくつも取ったし、みんなもよく打った。

同点の六回裏、ワンナウトランナー二塁。次は僕だ。

バッターボックスに立ってみんなの応援を背中に聞いていたら、なんだか足がふるえてきた。

監督のサインは、『思い切り打て。』

「いくぞー！！」

大きく声を出して気合いを入れたけど、心配は消えない。

もし打てなかったら？ 大きく空振りしたら？ どうしよう、どうしよう。

そう思っていたら、なぜかひまわりの声が頭の上から聞こえてきた。

「肩の力ぬけ。リズムを取るんや」

深呼吸して練習通りのフォームに直す。

ピッチャーが投げた。リズムを取って、思い切りバットを振った！ すごい手応え！

カキーンと打ったボールは青い空をつっ切って、レフトの向こうに落ちた。

みんな僕の方を見て、走れって叫んでいる。

僕は全速力で走った。一塁をまわって二塁をけて三塁に向かうと中でレフトを見たら、ボールをつかん投げようとしている。

ひまわりの大きな声が聞こえた。

「ボールにかまうな。早う走れえ！」

三塁をけて思い切り走ってホームにすべりこんだたん、土ぼこりがまい上がった。

背中にグローブの感触。でも中指の先には！

「セーフ！」

「やったああ！」

僕は思わず飛び上がった。ベンチに戻ると、みんなが笑顔で迎えてくれた。

その時大きな影が僕の上を横切った。見上げると、ひまわりの型をした大きなU F Oが僕の頭の上でピカピカ光った。

U F Oからあの声がした。

「ナイスバッティング！」

え？ UFO？ もしかして、宇宙人だったの？

「ありがとう！ 今度はU F Oに当たるくらい大きいのを打つからな！」

僕が大きく手をふると、U F Oはなんだかうれしそうにジグザグ飛んで、ぱっと消えた。

おしまい